〔駒沢女子短期大学　研究紀要　第三十六号　P一一～二七・二〇〇三〕

『舎利弗問経』試解

千葉公慈

一、はじめに

インド仏教史研究でも第一人者であった平川彰博士が平成十四年の三月三十一日に他界され、その訃報を追いかけるように袴谷憲昭氏による『仏教教団史論』が去る七月一日に大蔵出版から上梓された。[1]*

いずれの先生もその教団史研究という分野では、特に大乗仏教の成立に関して、従来の常識を覆す画期的な説をご主張された方々である。今から二十年ほど昔、筆者の学生時代の話になるが、当時の駒澤大学における通常の「基礎仏教学」といった授業では、大衆部や仏塔崇拝グループを中心にした在家主義仏教が、基本的には大乗仏教運動の中核を担ってゆくのである、という所謂「大乗仏教在家教団起源説」と称される見解が、平川博士ご本人によっても、また他の何れの先生方からも定説として講義されていた。しかしながら、その時すでに袴谷氏の演習に限っては、東京大学の山口瑞鳳博士のご意見を紹介された上で、如何なる出家主義の仏教が大乗たり得るのかが議論され、更に唯識思想を批判的に考察されて、むしろ大乗の仏典ではなく「三世実有」の見解に立った説一切有部の思想を考察してこそ、そこに正しい仏教が謙虚に示される可能性があるという主張がなされていたと記憶している。詳細は最近公にされた『駒澤短期大学仏教論集』第八号を参照されたいが、[2]*いずれにしても従来の大乗仏教の起源に関する議論は、現代における出家とは何かというテーマとともに、筆者にとって過去の問題ではない。本稿に至った直接的な動機として、時に本学内の授業でも仏教教団史を講義しなければならないという個人的事情もあるが、それよりも第一義の動機として、大乗仏教における菩薩の思想には如何なる起源があるのかという問題がある。これらを解明する傍証のために、本稿は大衆部展開の歴史的考察を目的として『舎利弗問経』（大正蔵第二十四巻、No.1465、八九九～九〇三頁）を採り上げ、国訳を試みることとした。すでに平川博士によって指摘されているように、大衆部は「上座部」という伝統の継承を示す名称に関して、すでに上座部に取られてしまったので、大衆部を釈尊や原始仏教

に繋げるためにも、別の努力を払わなければならなかった事情があったと考えられている[*3]。

そのようにして伝持されたのが、この『舎利弗問経』であるが、ここでは大衆部を「迦葉の結するところを大衆律」の立場と表現し、上座部こそを「外に遺すところを採綜し、始学を誑惑し、別に群党をなすのを新律となし」て、互いに是非を争った。そこで一比丘が王に判決を求めると、その王は二部を集めて行籌せしめたというが、結果的には旧律を楽う者は万数であり、新律を楽う者は百数であったために、前者を「摩訶僧祇」と名付け、第一結集にて結集した律を「大衆律」となし、後者を上座部と位置づけたという。

こうした基本的な立場として、枝末分裂に関する貴重な記述までも数多く見られ、また本経の国訳も未だ存在しないことから、本考察の余地もあろうかと考えた次第である。ちなみに本経の国訳を直接すすめていただいたのは佐藤達玄博士である。佐藤博士には謹んで御礼申し上げるとともに、予め誤読のお詫びを申し上げ、更に多方面からのご叱正を乞う次第である。

二、解　題

『舎利弗問経』一巻。東晋（三一七～四二〇）頃の訳出。訳者は不詳。舎利弗の質問を受ける形式で、仏陀が教団の歴史や、戒律の伝持に関する種々の事項を雑然と述べる経典である。上座部の分裂についての記述がある点でも注目されるが、本書では大衆部律は大迦葉尊者の第一結集の律を継承していることを強調し、しかもそれが大衆（万数）の支持を獲得したと述べる。そして上座部律は新律であり、支持者も少数であったとなしている。これは大衆部律をかかる形で、在世の釈尊に繋げようとする主題が読みとれる。

更に弥勒菩薩のことを説き、分若多羅という長者子が、家を捨てて無上道を修することを願い、大目建連にしたがって、巴連弗邑の天王精舎で受具戒を求めたことを述べており、ここにパータリプトラの天王精舎を挙げている。

続いて文殊師利菩薩が「舎利弗は声聞中の智慧第一であると仏陀によって讃嘆されている」と述べており、文殊菩薩に言及しているところから大乗との密接な関係が認められる。因みに巴連弗邑の天王精舎は、法顕が『摩訶僧祇律』を発見したところであり、このことは、法顕の「摩訶僧祇律私記」に記されている。

三、凡　例

①底本、および参考文献について

底本は、大正蔵第二十四巻、No.1465、八九九頁下段～九〇三頁上段とする。なお他に以下のものが存するが、本稿ではこれらを参照しつつ、最善と思われるものを採用した[*4]。

卍正蔵経・第三十六冊、四一一頁上段～四一七頁下段。

宋版磧砂大蔵経九三五、律部、第二二巻、四六二頁上段～四六五頁中段。

影印高麗版大蔵経、第二三巻、四分律外三七部、七五九頁上段～七六三頁下段。

新編縮本乾隆大蔵経、第一一四七番、第七五巻、三五九頁上段～三六八頁下段。

②漢訳の書き下しと脚註について

［　］は原文にはないが、脈絡上、補足したものである。

（　）は、語義を補うための換言術語である。

四、本文書き下し

是の如く我聞く。ある時、佛、羅閲祇[5]の音楽樹[6]下に住す。大比丘衆一千二百五十人と俱なり。十方に結盡の解脱を名聞し、八部鬼神等[7]、法要を聞かんと願う。

舎利弗、座より起きてすすみ、佛に白して言さく、「世尊、佛は是れ法王にして、衆生の欲するところに随い、説法の教えを散じ、諸天人をして恭敬し奉持せしむ。或いは聞き、傳え聞く。或いは行じ、行ぜざるなり。云何が行法と名づくか。云何が不行法と名づくか。」

佛言わく「善きかな。善きかな[8]。汝よく諸の衆生のために、是くの如く問いを作す。諦かに聴け。諦かに聴け[9]。吾、汝のために説く。夫れ行法とは、聞き而も持すること有り。傳え聞き而も持すること有り。皆名づけて僧に曰く、寶事は比丘の如し。佛の諸説は諸行無常と聞く。即ち生滅を観じ、諸の有漏を断ずる。眞なる吾が弟子、是れ行法者なり。其の傳聞とは、観身の比丘の如く、汝の説を聞く。迦留陀夷[10]に説く。飲酒は、放逸の門を開き、行道に於いて大いに留難[11]を作す。即ち無諍三昧[12]に入り、見道[13]の断集[14]を得る。我法を行ずるとは、非法を行ぜざるなり。非法を行ずるとは、是れ不行と名づく。是れ非法の人なり。吾が弟子に非らずんば、邪見の稠林[15]に入らん。」

舎利弗、佛に白して言さく、「云何が世尊、諸の比丘のために所説の戒律を或いは開き、或いは閉ざすやと。忽ち起こる長者の設供のための如し。諸の比丘断じて、朝食を聴さず。社人[16]の請けるための如し。復た飯祓[17]・魚肉の食を聴す。頻に富む村人の請けるための如し。復た飯の食を聴さず、但だ薄粥のみを食す。頻に婆娑羅王[18]の請けるための如し。復た飯食の飽食を聴す。闡陀利師[19]の請けるための如し。復た多家の數數食[20]を聴す。皆、飽くることを得ず。諸此の語の如し。後の世に、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、云何が奉持せん。」

佛言わく「我が言の如きは、是れ随時に名づけ、此の時中に在りては、應に此の語を行ずべし。彼の時中に在りては、應に彼の語を行ずべし。利行を以っての故に、皆、應に奉持すべし。我、泥垣[21]を尋ぬれば、大迦葉等は當に共に分別すべし。比丘・比丘尼のために大いなる依止を作す。我の如くに異ならずんば、迦葉、阿難に傳付す。阿難、復た末田地[22]に付す。末田地、復た舎那婆私[23]に付す。舎那婆私、復た優波笈多[24]に付す。優波笈多の後に、孔雀輸柯王[25]、世に経律を弘む。其の孫、名づけて弗沙蜜多羅[26]とよぶ。正しき王位を嗣ぎ、顧みて群臣に問う。〝云何が我をして名事を滅せざらしむや〟と。時に臣言あり。〝唯だ二事のみ有り〟と。何等を二と為すや。猶、先王、八萬四千の塔を造るが如し。傾國[27]の物を捨て、三寶を供養す。此れ其の一なり。若し其れ爾らずんば、便ち應に之に反するべし。塔を毀り法を滅して、息心の四衆[28]を残害す[29]。此れ其の二なり。名を好むと

雖も、悪は俱に不朽なり。王曰く、〃我に威徳無きを以て先王に及ぶ。當に次業を建てるを以て名づけて行と成すべし〃と。即ち四兵[30]を御して鶏雀寺[31]を攻むる。寺に二石の獅子有り。哮吼[32]して地を動かし、王大いに驚きて怖退し、走りて城に入り、人民を看ては、嗟泣[33]路に盈つる。王、益々忿怒し、自ら敢えて入らずに逼兵の将、駆けてたちまち死害を行なう。督、勤をして七衆[34]を呼ばせしむ。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・沙彌・沙彌尼・式叉摩那の出家・出家尼一切会して集まる。問うて曰く、〃塔を壊すること好やいなや。房を壊すること好むやいなや〃と。倹じて[35]曰く、〃願わくば皆、壊することなかれ。已に得ざるが如し。房を壊するべきのみ〃と。王大いに忿萬[36]し曰く、〃云何が可からざらんや〃と。因遂してこれを害するに、少長[37]を問うこと無し。血は流れて川と成る。諸の寺塔を壊すること八百餘所なり。諸の清なる信士、聲をあげて號叫し、悲哭して懊悩[38]す。王、囚繋[39]を取りて、其れに鞭罰[40]を加える。五百羅漢、南山に登り、獲免[41]す。山谷に隠険し、軍甲至ることあたわず。故に王、恐れて洗わず、諸国に賞慕[42]す。若し一首を得れば、即ち金銭三千を償はんと。君徒鉢歎阿羅漢[43]、佛に及んで[44]、嘱累[45]するところの流通[46]の人となり、無量の人を化作す。無量の比丘・比丘尼の頭を捉えて、處々に金を受け、王、諸の庫蔵を空立曷[47]す。王、益々忿怒するも、君徒鉢歎、身を現じて滅盡定[48]に入る。王、自ら害を加えるも、定力[49]を所持する初めは傷損無し。次いで経臺[50]を焼き、火就き始めて然して焔炎、経に及ぶ。彌勒菩薩[51]、神通力[52]を以て我が経律に接し、兜率天[53]に上る。次いで牙歯塔[54]に至る。塔神曰く、〃蟲行神[55]有り。先ず我が女を索むるも、我いささかも与えず。今、誓って法をして護らしむる。女を以て之を与え、心伏至らしむる〃と。蟲行神喜び、手で大山を棒き、用を以てすれば、王及び四兵衆を厭い、一時に皆死す。王家の子孫、斯に於いてすべて盡きる。其の後、王あり。性は甚だ良善なり。彌勒菩薩、三百童子を化作す。人間に下り、以て佛道を求む。五百羅漢より法教を諮り受ける。國土男女、復た共に出家す。是くの如く比丘・比丘尼還って復た滋繁く、羅漢天に上る。経律を接取し、人間に還る。時に比丘あり。名づけて總聞と曰う。諸の羅漢および國王とに諮り、我が経律を分かち、多くの臺館を立つるも、求学の来るを難と為す。

時に一長老あり。名聞[56]を好んで亟ば諍論を立てる。我が律を抄治して開張し[57]、増廣す。迦葉の結する所を大衆律と曰い、外に遺す所を採綜し、如学を誑惑し、別に群覚をなして互いに是非を言う。時に比丘あり。王に判決を求め、王は二部を集めて、黒白の籌[58]を行ず。衆をして宣せしめ、もし舊律を楽はば、黒籌を取るべし。もし新律を楽はば、白籌を取るべし。時に黒を取る者は、乃ち萬数あり。時に白を取る者は、只だ百数あり。王、以て皆を仏説となす。好楽[59]を同ぜざるは、共處に得ざるなり。舊を学ぶ者は、多に従って名を為して「摩訶僧祇[60]」と為すなり。新を学ぶ者は、少なくして是れ上座なり。上座に従って名を為して「他俾羅部[61]」と為すなり。他俾羅部は、我世を去りし時、三百年の中、諍に因っての故に、復た薩婆多部[62]と及び犢子部[63]とが起こる。犢子部に於いては復た、曇摩尉多別迦部[64]、跋陀羅耶尼部[65]、沙摩帝部[66]、沙那利迦部[67]が生ず。その薩婆多部には

復た、彌沙塞部[68]が生ず。目建羅優波提舎[69]にて曇無屈多迦部[70]、蘇婆利師部[71]が起こる。他俾羅部には復た、迦葉維部[72]と修多蘭婆提那部[73]が生じ、四百年の中、更に僧伽蘭提迦部[74]が生ず。摩訶僧祇部は、我滅度の時、二百年の中、異論の生ずるに因りて、革卑婆訶羅部[75]、盧迦尉多羅部[76]、拘拘羅部[77]、婆収婁多柯部[78]、鉢蠟若帝婆耶那部[79]が生ず。三百年の中、諸の異学に因りて、この五部に於いて復た、摩訶提婆部[80]、質多羅部[81]、末多利部[82]が生ず[83]。是くの如くの衆多、久しく後に流傳し、若しは是、若しは非、唯餘の五部のみ、各長ずる所を挙げて、その服色に名づく。摩訶僧祇部は、衆経を勤め学び、眞義を宣講し、以て本に處り中に居る。應に黄衣[84]を著くべし。曇無屈多部は、理味に通達し、開導利益し、表に殊勝を發す。應に赤衣[85]を著すべし。薩婆多部は、博通敏達、以て導いて法化す。應に梍衣[86]を著すべし。迦葉遺部は、精勤勇猛にして、衆生を摂護す。應に木蘭衣[87]を著すべし。彌沙塞部は、禅思[88]微に入り、幽密[89]を究暢[90]す。應に青衣[91]を著すべし[92]。是の故に羅旬喩比丘、分衛[93]するも、食を得ることあたわず。後に五種の律衣を以て、更互に著す。便ち大いに食を得る。何の故を以てか。是れ其の前世、執性は多慳[94]なり。沙門来たるを見て、急いで門戸を閉ざして云う。〝大人は在らず〟と。他の布施を見て歓喜して念を摂し、發心して願って沙門となる。是の故に今身は出家を得ると雖も、窮弊[95]すること此の如し。我法にて出家し、純ら服は弊帛[96]と及び死人の衣なり。羅旬踰[97]に因りての故に、種々の衣を受けるなり。

舎利弗言わく「如来は正法なり。云何が少時[98]に分散[99]すること是の如しかと。既に本味を失いて云何が奉持せんや」と。

佛言わく「摩訶僧祇、其の味は純正なり。其の餘部の中も甘露を添えらるるが如し。諸天は之を飲む。但だ甘露のみを飲み、水を棄て去る。人間は之を飲み、水露と倶に進む。或いは時に消疾し、或いは時に結病す。其れを読誦する者は、復た是の如し。多智慧の人は、能く取り能く捨つるも、諸の愚癡の人は、分別することあたわず」と。

舎利弗言わく「如来は先ず云う。若し寒國土にては、諸比丘の身は俗服を著し、及び頭首を覆うを聴す。迦那比丘、大林や聚落[100]を行く。天は大寒に値し、鳥獣は尽く死す。村人、其の俗衣を与える。世尊、其れを懺悔せしむるとは何ぞや」と。

佛言わく「染色を著し、在衣の裏のみを置くを聴す」と。

舎利弗言わく「云何が世尊、常に言わんや。諸の比丘、鉢を以て布地を得ざれども、當に浄物を以て敬手るべし。若し浄物無くんば、當に草葉木葉を以てすべし。君輸柯比丘、其れを眷属に与え、日難王の請いを受ける。浄板を行き、鉢を敬手る。云何が世尊、之を罵りて言うや。是れ悪魔の行にして行法にあらざるは、我が言、清浄物を以て染を受けず。若し浄無き者は、乃ち草木の葉を用ゆ。一用即ち葉は、木皮・木肉を用いることを得ざれ。其の體中に本、膠有るを以ての故なり。若しは膠、若しは漆、塵を受けるを以ての故に、若し已に枯燥せしは、本是れ有るが故なり。湿熱、更に流れるが故なり。」

舎利弗、佛に白して言さく、「世尊、云何が諸比丘は施主の請食と及び僧家の常食とを受くるを聴すや。云何が蘭若提比丘[101]、無畏の長者の請食を受くるや。如来、罵りて云う。〝是れ土木の人にして、應

に人食を食するべからざるなり〃と。」

佛言わく、「威儀を破壊するを以ての行食とは之なり。時に但だ眼を以って視て、手を以って受けず。外道の梵志、尚、受取を知る。況や我が弟子、食を受けざるをや。何ぞ況や食に於いてをや。一切諸物を受けざるを得ず。唯だ生寶と及び女人を施すを除く。若し法を作さん者は、猶、應に體上の衣を授与すべし。若し器に貯金を受くれば、則ち判施[102]なり。」

舍利弗、佛に白して言さく、「云何が世尊、遮道の法を説くに、飲酒は帝歴子[103]の如く得ざるや。是れ破戒の放逸門を開くと名づく。云何が迦蘭陀竹林精舎[104]なるや。」

「一比丘に疾病あり。年を経て危篤となり、将に死せんとす。時に憂波離[105]、問いて言う。〃汝は何の薬を須うるか。我は汝の為に覓む。天上・人間乃至十方、是れ應に用うべき所、我みな為取す〃と。答えて曰く、〃我、須うる所の薬、是れ毘尼[106]と違うが故に、我覓めざるを以て此れに至る。寧んぞ身命を盡くすに犯律を容すこと無からんや〃と。優[107]波離言わく、〃汝の薬、是れ何ぞ〃と。答えて曰く、〃師言わく、酒五升を須うる〃と。優波離曰く、〃若し病を為して開くるは、如来の許す所なり。〃為乞して酒を得、服して已に差を消す。差は已に慚を懐く。猶ほ犯律と謂うが如し。至りて佛所に住し、慇懃に悔過[108]す。佛の説法を為すを聞き、已に歓喜して羅漢道を得る。佛言わく、〃酒に多失あり。放逸の門を開く。飲むは亭歴子の如し。犯罪を已に積む。若しは病消ゆるか、若しは先の所断にあらざるか〃と。」

舍利弗、又、佛に白して言さく、「云何が如来、常に言うや。衆生乃至蟻子を殺すこと得ず。朧月[109]八日を以て、舍衛國は長水河邊に於いて、輸麗[110]外道と術を角り、先ず逼りて神通力を以て負處を墮さしむ。其れ慚羞生じ、水に投じて自盡す。眼は沈没を視て拯救[111]せざるか、亦、殺さざるか。」まさに復た、衆に告げて言わく、「輸麗、此の悪法を持して衆生を惑乱するも、前世の善熟は此の悪身を滅して、轉じて善見を生ずるは、また快にあらずや。我が諸の弟子、當に此の日に於いて清浄なる浴洗を設くるべし。身垢を浣い、倒見を除かんと念ずる身は、清浄心のごとし。亦清浄を結び、人をして似せしむるは、慈悲の有ること無し。」

佛言わく、「大智よ。汝よく諸の未だ通達せざる者のために、斯くの誠要[112]を問う。輸麗外道、無量の世中に於いて、邪見を積集し、誓って正法を障す。往昔、燈明佛[113]の時、我、菩薩道を行く。一村落に遇い、人多く萬病にて死者は縦横にあり。我、衆薬を採るに随って、宜しく救済し、皆、除愈[114]を得るべし。其の中、一人あり。名づけて不戴と曰う。是れ梵志の学[115]にして多能を自負し、信服を肯わず。終わらんと欲する時に臨みて、まさに復た我を求む。我この語を云う。〃汝、先ず治すべき薬を与えるも取らず。今、将に気盡きんとするに、まさに復た求めあり。汝の如く、即時に薬の能く治するにあらざるなり。〃不戴曰く、〃我今、復た優劣を判することあたわず。願わくは未来世にて、共に勝負を決せん。我若し負ければ、當に身を殺すべし。生を求め、汝の弟子とならん。汝若ししからずんば、我のための走使[116]ならん〃と。時に我報いて云う。〃善き哉、善き哉。〃故に今、此の土に生じ、我と相値う。臨終に善熟し、共に所會を契る。言を發

するに據を失い、其の眷属を耻じる。投水して自害す。身は死亡すると雖も、心は善を發するが故に、我が法中に生ず。勝進有るが故に、我救わざるなり」と。

舎利弗言して云う、「何が訓戒中に於いて弟子をして右肩を偏袒[117]せしむるや。また迦葉の村人のために『城諭経[118]』を説いて云う、〝我が諸の弟子、當に正しく袈裟を被るべし。俱に両肩を覆い、肌肉を露わすことなかれ。上下をして斎しく平らかならしめ、福田相を現じ、庠序[119]を行歩す〟と。また言う、〝胸臆[120]を現ずことなかれ〟と。此の二言に於いて、云何が奉持せん。」

佛言く、「供養を修する時、應に須く偏袒すべし。以て便ち事を作す。福田を作す時、應に両肩を覆うべし。田は文相を現ず。云何が供養を修せん。佛を見んと如する時にして師僧を問訊する時、應に事相[121]に隨うべし。若しは床を拂い、若しは地を掃き、若しは衣裳を巻き、若しは周く正に席を薦め、若しは泥地に華を作し、若しは足下を建高[122]し、若しは麗い、若しは種種の供養に移らば、云何が福田を作す時、國王の食を請せん[123]。里に入り乞食し、坐禅・誦経して樹下に巡行す。人、端嚴[124]に見え、観ずべきことあるなり。」

舎利弗、復た佛に白して言さく、「世尊、八部鬼神[125]は何の因縁を以て悪道に生じ、而も常に正法を聞くか」と。

佛言く、「二種の業を以てす。一に、悪を以ての故に悪道に生ず。二に、善を以ての故に多く快楽を受く。」

又問う、「善悪の二異は同じく得るべきか」と。

佛言く、「また得るべきのみ。是れ八部鬼神を以て、皆、人非人と曰うなり。天神[126]は、其れ之の先身は、車輿舎宅の飲食を以て、三寶と父母、賢勝の人に供養するも、猶、慳しみ、倹く、諂い、嫉妬を懐くがごとき者は、故に天神の身を受く。普光浄勝天神等の如し。虚空龍神[127]は、徳本[128]を修建し、廣く檀波羅蜜[129]を行ず。正念に依らず、急いで性は瞋りを好むが故に、人非人の身を受く。摩尼光龍王等の如し。夜叉神[130]は、大なる布施を好み、或いは先ず損害し、後に饒益[131]を加える。勝負の功に隨うが故に、天上・空中・地下に在り。乾闥婆[132]は、前生もまた瞋恚[133]少なく、常に布施を好み、青蓮[134]を以て自ずから厳かにして、衆の伎楽を作す。今、此の神のために、諸天のために諸伎楽を奏す。阿修羅神[135]は、志強く、善友の所作の浄福に隨わざるも、好んで幻偽の人を逐う。諸の邪福を作し、傍らの邪師に於いて甚だ布施を好む。また、他の鬪訟を楽観す。故に今身を受く。迦婁羅神[136]は、先ず大捨[137]を修し、常に高心[138]有するも、物を凌すを以ての故に、今身を受く。緊那羅神[139]は、昔好んで人を勧め、菩提心を發こすも、未だ其の志、正しからず、諸の邪行を逐うが故に、今身を受く。摩目候羅伽神[140]は、布施と護法の性なるも、瞋恚を好むが故に、今身を受く。人非人等、みな邪師に依附[141]するに由りて、諂って悪道を行く。邪を以て正を乱すは、俱に是の道を謂う。自らの建立[142]を以て、夫れ出世の道は、魔邪[143]の諂悦[144]の語を雑えず。諂悦の語は、生死を出るにあらず。是れ悪道に入るなり。諂悦は、邪人の言説すべき所なり。大に似道[145]を観れば、細には則ち鑠[146]を目炎[147]す。當に正法に依りて、及び正法を行ずるべし。當に佛法僧の力を得、解脱の無為なるべし。若し相似の法に依り、邪導師に依行すれば、繋縛[148]の生死は、

永く悪趣に淪まん。是れ無知の人にして、出世を求むるにあらず。邪見の網に入る。邪導師とは、衆経を讀むと雖も、邪事の業を以て邪なる科を矯製[149]す。邪諂の法出でて、凡人を狂惑す。敬仰を求むるを以て、人知る所にあらざるを説いて、我知るを云う。人得る所にあらざるを説いて、我得るを云う。或る人、難じて曰く、「那ぞ知るや。那ぞ得るや。」答えて曰く、「空界・天神・幽中の知識なり。密にして我語る。」或るいは云う。「某年某月に、利有り。害有り。逆らって相を開示し、應に防ぐべし、應に救うべし」と。此の滅、彼と我得て、汝失う。是くの如く薄俗の人を欺誑[150]す。よく深く徳本を思うことあたわず。邪なる末を隨逐[151]し、其の正見を失う。邪業を興造し、生じて銭帛[152]を顧みる。死して悪道に入り、舌を抜かれ、銅を呑むこと百千萬歳なり。後に畜生となって、また無量歳なり。復た鬼となって生まれ、或いは山林・曠野・河海の舎宅に在り。益、詔誑[153]し、休息有ること無し。或いは、行く人を迷謗し、道径をして失せしむ。或いは、邪なる巫言[154]を示語す。先亡の形服[155]、恐動[156]は百端[157]なり。甚だ悪を賤むべく、人の飲食を求む。終極有ること無し。我が弟子に値い、心に正直を懐き、正念を失せざる者は、聞いて即ち訶叱[158]し、終に敢えて復た為す。若し我が弟子、心に怯弱[159]を懐き、心を失し易き者は、其れより免を求め、踰えて其の便を得る。千端萬緒の求索[160]を厭うこと無し。是の如きの人は、丈夫[161]の相無し。邪所の動を為し、死して悪趣に墮つ。甚だ悲を念ずべし。

舎利弗、復た佛に白して言さく、「八部鬼神は、空に依り空神となし、地に依り地神となすか。」

佛言く、「別に地神あり。浄華光等の如し。過去世の時、好んで布施を修す。多瞋は満[162]を難じ、酒を嗜み、歌舞を喜ぶ。故に此の神となって純白の衣を著し、潔浄にして垢れ無し。」

舎利弗、復た佛に白して言さく、「云何が如来は、天帝釋[163]及び四天大王[164]に告げて云うや。〃我、久しからず滅度す。汝ら各、万土に於いて我が法を護持せん。我、世を去りし後、摩訶迦葉[165]・賓頭盧君徒般歎[166]・羅目候羅[167]・四大比丘、泥水亦[168]にあらざるに住して、我が法を流通す〃と。」

佛言く、「但だ像教の時のみ、信根[169]は微薄にして、信心を發すると雖も、堅固なることあたわず。諸の佛弟子、感致[170]することあたわず。專ら累年に到ると雖も、佛の世に在します時の、一念の善に如かず。其の極なる慊[171]至りて、復た二の向[172]無し。汝、證信をなして、事の厚薄に隨って、佛像・僧像を現ず。若しくは空中を言い、若しくは光明乃至夢想をなす。其れをして堅固ならしむ。彌勒下生[173]して、汝泥水亦を聽かん。」

舎利弗、復た佛に白して言さく、「如来、世に現れし二十年前、諸の弟子を度して、常に施有ること無く、便ち施有るに隨う。二十年より後の〃施多定物〃是の義云何。」

佛言く、「長者の子あり。名を分若多羅と曰う。宿して善根あり。婆羅門の家に生まるる。家を捨て、無上道を修することを楽欲[174]して、大目牛建連[175]に隨って、巴連弗邑[176]の天王精舎に於いて受具戒を求む。目連語りて云う、〃汝、七日七夜に汝の先罪を悔いて皆清浄ならしむべし。諸の妨障無きは、我當に汝のために僧中より乞うべし。〃

分若多羅言して云う、〃何ぞ妨障の已に滅するを知り得るや。云何が我、得戒を受くるを知り得るや。仰ぎ願わくは諸佛、我を威神に加え、我をして罪滅し、得戒の相を見ることを得せしめんことを。〃佛言く、〃汝、但だ勤誠のみなり。誠に至れば、自ずから見えん。〃分若佛に白さく、〃謹んで教えを尊び奉らん。〃懇惻[177]*すること日夜、第五の夕に到りて、其の室中に種々の物、雨ちる。若しは巾[178]*、若しは巾巴[179]*、若しは拂[180]*、若しは箒、若しは刀、若しは斧、若しは錐、若しは金産[181]*、次第に分別して目前に墮つ。分若多羅、歓喜の心生じ、得果の心生ず。七日満ちて已に、具さに目連白す。目連我に問う。我、之の語を曰う、〃是れ離塵の相にして、拂い割かつ物なり。當に以て師に口親[182]*すべし。師は其の縁なり。夫れ受戒は、其の力を辨えるに隨って、以て施をなすべし。此れに限らず、必ずしも此れを備えざるなり〃」と。

舎利弗、復た佛に白して言さく、「世尊、諸の檀越あり。僧の伽藍を造り、厚く資給[183]*の供えを置く。來世の僧に似[184]*なる出家僧あり。非時[185]*に典食の僧[186]*に就き、食を索めてしかも食す。與える者と食す者には、何等の罪を得るや。其の本の檀越、何等の福を得るや。」

佛言く、「非時食[187]*の者は、また是れ破戒の人なり。是れ犯盗の人なり。非時に與える者は、また破戒の人なり。また犯盗の人なり。檀越の物を盗むとは、是れ取りて與えざるなり。施主の意にあらざるは、施主に福は無し。物失せるを以ての故に、猶、發心せる置立[188]*の善のごとし。」

舎利弗言わく、「時に受けて時食[189]*す。食盡きずんば、非時に復た食せん。或いは時に受けること有りて、非時に至りて食す。復た福を得るやいなや。」

佛言く、「時食せる浄とは、是れ即ち福田なり。是れ即ち出家なり。是れ即ち僧伽なり。是れ即ち天人の良友なり。是れ即ち天人の導師なり。不浄とは、猶、破戒をなすがごとし。是れ大劫[190]*の盗なり。是れ即ち餓鬼なり。罪の窟宅[191]*をなす。非時に索むるは、時と非時を以て、非時に輒く與う。是の食を典る者は、是れ退道と名づく。是れ悪魔と名づく。是れ三悪道[192]*と名づく。是れ破器[193]*と名づく。是れ癩病人なり。善果を壊する故に、偸み乞うて自活す。是の故に諸の婆羅門、非時に食さず。外道の梵志もまた邪食せず。況や我が弟子、法を知り、法を行ずるにおいてをや。當に爾るべしや。凡そこの如き者は、我が弟子にあらず。是れ我が法の利を盗む、無法の著しき人なり。名を盗み食を盗む、非法の人なり。盗與と盗受は、一団一撮、片監片酢なり。死して火焦腸地獄に墮つ。熱鉄丸を呑む。地獄より出て、猪狗中に生ず。諸の不浄を食し、又、悪鳥に生ず。人、其の聲を恠[194]*しみ、後に餓鬼に生ず。伽藍中に還る處、都て廁内の糞穢を口敢食[195]*す。並びに百千萬歳、更に人中に生じては、貧窮の下賤なり。人の棄悪する所にして、言説すべき所を人は信用せざるなり。一人の物を盗む其の罪、尚、軽きに如かず。多人を割奪するが故なり。良福田の故に出世道を断絶するが故なり。」

舎利弗、復た佛に白して言さく、「如来の宗親[196]*に多く出家あり。自らの發心のためか、佛の神力のためか。」

佛言く、「諸の釋は、心喬慢[197]*の著楽[198]*なり。何ぞ能く願楽[199]*する

や。特に是れ父王の宣勒[200]なり。宗室[201]に二子生ずれば、一人は我に隨う。阿那律[202]、久しく善根を積み、深く正法を楽う。釋子の跋提[203]・難提[204]・金毘羅[205]・難陀[206]・跋難陀[207]・阿難陀[208]・提婆達多[209]・優波離[210]を携率[211]す。澡浴[212]し清浄として、至りて我が所に来る。出家を求めんと欲して、時に上座あり。毘羅荼[213]と名づく。別に阿難と阿難陀を度す。次いで一上座を婆修羅[214]と名づく。別に提婆達多と跋難陀を度す。唯、阿難は不忘[215]の禅を修する。宿習[216]の總持[217]なり。少時中に於いて、佛覚三昧を得る。百萬の川水を積み、攪して[218]以て雨となる。雨水は奔流[219]として大海に入る。阿難の手を海中より取りて、以て色味を分別す。雑せず、還って本源を置く。漏失あること無し。」

文殊師利、佛に白して言さく、「世尊、舎利弗は如来の常言にして、其れ聲聞中に於いて智慧第一なり[220]。小心[221]を謂わず、よく要義を問う。」

佛言く、「其れ久しく明悟を種え、我が法を發揚す。諸慧の利を以て、衆生を利するが故に。云何が如来、父母の恩を説かん。大いに報ぜざるべからず。」

又言う、「師僧の恩は、称量するべからず。其れ、誰をか最たるものと為さん。」

佛言うく、「夫れ在家者は、事えて父母に孝じ、膝下[222]に在り。報を生ずるを以て、長じて之れを與うる等はなし。生育の恩深きを以ての故に、大を言うなり。若し師より學び、知見を開發すれば、次いで恩は大なり。夫れ出家者は、其の父母の生死の家を捨つ。法門中に入り、微妙の法を受くるは、師の力なり。長じて法身を生じ、功徳の財を出づる。智慧の命を養い、功莫[223]は大なり。其の所生を追って、乃ち之に次ぐのみ。」

又言う、「當に何ぞ斯の経を名づくるべきか。」

佛言く、「當に菩薩の問喩を名づくるべし。廣大を以ての故なり。又、舎利弗問うを名づく。爾の時、四衆[225]しゅ[224]は是の説を聞き已る。五十の新學の比丘、信根[226]成立[227]し、法眼は清浄なり。舊徳[228]、天人、八部等、みな大いに歓喜し、禮を作して去る。

舎利弗問経

（二〇〇二年十一月三十日脱稿）

註

＊1 袴谷憲昭『仏教教団史論』大蔵出版、二〇〇二年七月一日発行。

＊2 袴谷「松本史朗博士の批判二篇への返答」『駒澤短期大学仏教論集』第八号所収、一六二頁上段、一六三頁下段。更に袴谷前掲書、二〇五～二五〇頁には、大乗仏教成立に関する関連資料と仮説、およびその論証が詳細に記されている。

＊3 平川彰『二百五十戒の研究Ⅰ』平川彰著作集第一四巻、春秋出版、四〇頁、二一三行。

＊4 この他にも本経は、縮冊蔵経・寒帙第九冊と、および卍字蔵経・第十九套八冊中にも存するが、本稿ではこれらを参照していない。

＊5 Rājagṛha の音写。マガダ国の首都の王舎城。

＊6 微風が触れると楽しい雅音を発する樹。（cf.『灌頂経』一二巻、

大正蔵二一、五三二中)

＊7八部鬼衆。釈尊の教えを守護する阿修羅等の八種の神々。

＊8インドでは、〝Sādhu sādhu〟として論者に賛意を表する。実にその通りである、の意。

＊9 śṛnuta sādhu ca suṣṭhu (cf.『有部律雑事』三十五巻、大正蔵二十四、三八三中)

＊10 Kāḷudāyin：柯留陀夷＝優陀夷。

＊11邪悪なる魔が入ってきて、人の善事をとどめ、修行を妨げること。(cf.『金光明経』四巻、大正蔵一六、三五四中)

＊12他人と争うことのない境地。(cf.『維摩経』大正蔵十四、五四十下)

araṇa-vihāriṇāṃ agryaḥ. (cf.『金剛般若経』大正蔵八、七四九下)

＊13四諦を観察する段階で、見所断の煩悩を断ち切る過程。最後の悟りの過程で、小乗では預流果、大乗では初地を言い、各々これ以上を聖者とする。

＊14苦の原因を断つこと。prahāṇa (cf.『中論』二四-二)

＊15密林。gahvara.

＊16社人＝村人。

＊17不明。

＊18不明。

＊19不明。

＊20続けて饗食にあずかること。先に他の招待を受けながら、処々で食物の供養を受けること。処々食・展転食。paraṃpara-bhojana (P) (cf.『十誦律』大正蔵二三、八八下)

＊21ないおん。煩悩の吹き消された安らぎの境涯。涅槃 (nirvāṇa) の俗形。

＊22 Majjhantika (P)：末闡提、アショーカ王時代に西北インドのカシュミール、ガンダーラ地方に仏教を伝えた比丘。

＊23 Śāṇaka-vāsin：商那和修比丘。

＊24 Upa-gupta：優婆きく多比丘。油鉢のこぼれる話で知られる。

＊25チャンドラグプタ王 (Candra-gupta) の孫、アショーカ王 (Aśoka)：紀元前二六三～二三二年頃在世のマウリヤ (Maurya：孔雀) 王朝の王。

＊26プシャミトラ (Puṣya-mitra)：アショーカ王の没後、次第に衰えたMaurya王朝を前一八七年に、軍司令官のプシュヤミトラが自立して政権を奪取するにおよんで王朝は滅亡した。新たにシュンガ (Śuṅga) 王朝を創始したが、激しく仏教を弾圧し、バラモン教の祭祀を復興した。

＊27危機に瀕した国家。

＊28息心は沙門 (śramaṇa) の旧訳で、四衆は比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷。

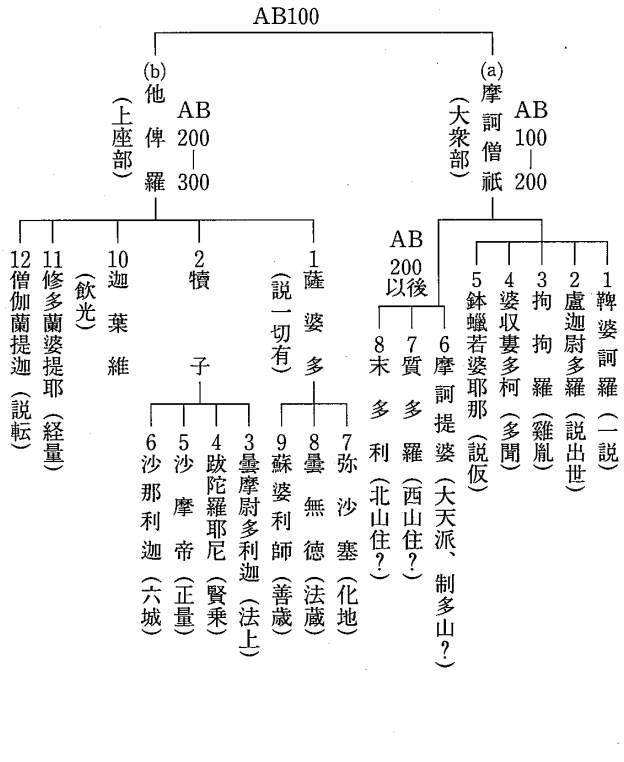
＊29危害を加えること。

＊30古代インドにおける四種の軍隊。象兵 (hasti-kāya)・馬兵 (aśva-kāya)・車兵 (ratha-kāya)・歩兵 (patti-kāya)。

＊31鶏園寺か。kurkuṭārāma. 仏教伽藍。
＊32ほえる。
＊33悲鳴。
＊34仏教教団を構成する七種の集団。
＊35恐る恐る。
＊36激しく怒ること。
＊37年少者も年長者も。
＊38悩むこと。
＊39囚人。
＊40鞭撻＝むち打つこと。(cf.『灌頂経』一二巻、大正蔵二一、五三三下)
＊41逃げ延びること。
＊42慕→募。懸賞金を賭けること。
＊43 Kuṇḍalā 比丘のことか。
＊44追いついて。
＊45布教の使命を付与すること。parindanā.
＊46仏法が広まり伝わること。(cf.『法華文句』十下、大正蔵三四、一四八下)
＊47完全に干し、枯らすこと。atiśodhayet…(cf.『瑜伽論』一六巻、大正蔵三十、三六四上)
＊48六識の心作用が滅びてなくなった三昧。不還果以上の聖者が修する精神統一。nirodha-samāpatti (cf.『倶舎論』一巻八ウ)
＊49禅定の力。samādhi-prabhāva (cf.『倶舎論』一三巻八オ、AKBh : p. 197)
＊50経典。
＊51マイトレーヤ (Maitreya) の威徳を示す点は、大乗との深い繋がりを意味する。
＊52聖者の倶備する天眼・天耳・他心・宿住・漏尽・神境の六神通。
＊53 Tuṣita の音写。欲界の六天のうちの第四天。
＊54 śukla-dantastūpa : 清く白い塔？
＊55不明。
＊56評判。
＊57展開すること。
＊58相互の論争の末にも是非の決着がつかない時には、事理によく精通し、戒に達した比丘・比丘尼を集め、黒白あるいは長短の籌（竹木をもって作った算木：çalākā）を投票して多数決にて判断する多人覓罪（たにんみやくざい）。(cf.『四分律』大正蔵二二、七一三下)
＊59好んでねがうこと。
＊60 Mahāsaṅghika. 大衆部。
＊61 Thera-vāda の音写。上座部。
＊62 Sarvāsti-vādin : 一切有部。『十誦律』を持する。
＊63 Vātsīputrīya.
＊64 dharmottara の音写。法上部。
＊65 Bhadrayānīya の音写。賢冑（けんちゅう）部。
＊66 Sāṃmitīya, Sammatiya の音写。正量部。
＊67 Saṇṇagarika, Channagirika の音写。密林山部。

＊68 Mahīśāsaka. 化地部。
＊69 Moggaliputta-tissa (P).
＊70 Dharmaguptaka. 法蔵部。
＊71 Suvarṣaka. 善歳部。
＊72 Kāśyapīya. 飲光部。
＊73 Sautrāntika. 経量部。
＊74 Saṃkrāntika. 説転部。経量部と混同されることもある。
＊75 Ekavyavahārika. 一説部。
＊76 Lokottara-vāda. 説出世部。
＊77 Kukkuṭika. 牛家部。
＊78 Bāhuśrutīya. 多聞部。
＊79 Prajñapti-vāda. 説仮部。
＊80 Caitya-vāda. 大天派。制多山部。
＊81 Avaraśaila. 西山住部。
＊82 Uttaraśaila. 北山住部。

＊83舎利弗問経所伝



（国民文庫刊行会編「国訳大蔵経戒律研究上」第一書房、八頁による）

＊84理義を象徴する色。
＊85明敏さを象徴する色。
＊86さいかち。豆科の落葉高木。ここでは黒色で、厳粛さを象徴する色。
＊87勇気を象徴する色。
＊88＝禅定。
＊89寂静の處。
＊90ゆきわたる。長じている。

＊91沈静を象徴する色。

＊92『僧史略』等によると、中国初期の外国僧衣の多くが絳衣（赤衣）とされているから、『四分』派の人が多かったということになるが、ただし『三千威儀』の巻末文には、薩婆多部は赤衣、曇無屈多部は黒衣、迦葉遺部は木蘭衣、彌沙塞部は青衣、摩訶僧祇部は黄衣と記されており、これと相違する。

＊93 piṇḍapāta の音写。乞食・行乞・托鉢と漢訳される。（cf.『六度集経』三巻、大正蔵三、一二上）

＊94ものおしみ。むさぼり。

＊95生活に苦しみ疲れること。

＊96贈り物の絹。ぬさ。

＊97踰→喩。

＊98しばらく。しばし。muhuttaṃ（cf.『五分戒本』大正蔵二二、一九七下、Pācittiya. 77）

＊99離れること。vigama（Laṅk）。

＊100森林や集落。

＊101 ārāmika-bhikkhu＝arāmika-bhikkhu(P)：出家の修行に適した場所（森林・原野 等）に住する比丘。十二種の頭陀行の第一。

＊102＝別施の行：逸脱すること。（vyabhicārin：Laṅk）

＊103薬草の一種、いぬなづなの実。雀の巾着。

＊104 kalandaka-nivāsa：マガダ国の首都、王舎城の北にある竹園を釈尊に奉った長者の名に由来する精舎。釈尊はしばしばそこに住して説法した。

＊105 Upāli：持律第一。

＊106＝毘那耶（vinaya）：律。

＊107＝憂

＊108過ちを悔いること。（paṭideseti：cf.『五分戒本』大正蔵二二、一九八下、*Paṭidesanīya* 1）

＊109十二月。

＊110 śṛṅga か √śṛ か？

＊111たすけすくうこと。

＊112純一で要を失わないこと。

＊113日月燈明佛の略。過去世に出現した佛陀。

＊114快復すること。

＊115バラモンの学生。

＊116はしりづかい。

＊117偏袒右肩（へんだんうけん）…ひとえ（偏）に右肩をぬぎ（袒）、左肩のみを覆って袈裟懸けするインドの礼法。（cf.『十誦律』大正蔵二三、三上）

＊118 *Nagarāvalambikāvadāna.*

＊119古代の学校。庠は、まなびや。

＊120胸中。心中。

＊121事情。

＊122高くあげること。

＊123請食＝招待を受けて食事をすること。（cf.『十誦律』大正蔵二三、二六四下）

＊124優雅で正しくととのっていること。（cf.『有部律雑事』二巻、大

正蔵二四、二一二上、：*Divyāv.* 19)

＊125 八部鬼衆。釈尊の教えを守護する阿修羅等の八種の神々。(cf.『宝性論』大正蔵三一、八二五上)

＊126 ① Deva：超人的な鬼神などの意。

＊127 ②(Ākāça-)Nāga：龍王。龍神。

＊128 Kauśala-mūla：功徳。善根の種。

＊129 dāna-pāramitā：布施の完成。

＊130 ③ Yakṣa：勇健暴悪で空中飛行の鬼神。

＊131 利益し、救済すること。

＊132 ④ Gandarva：半神で音楽を奏でる天上の楽師。

＊133 いかり憎むこと。

＊134 優鉢羅 (utpala)。青と白の分明の佛眼に喩えられる睡蓮の一種。

＊135 ⑤ Asura：悪霊であるが、果報が天に次ぐもの。

＊136 ⑥ Garuḍa：金翅鳥(きんしちょう)のことで、龍を食う。

＊137 大きな布施。(cf.『八佛名号経』大正蔵一四、七七上)

＊138 たかぶった心。(cf.『弥勒成佛経』大正蔵一四、四三四上)

＊139 ⑦ Kiṃnara：角がある歌人で、半人半獣。

＊140 ⑧ Mahoraga：蛇神。

＊141 よりすがる。たよる。

＊142 人々を正しい方向へ立てていくこと。(cf.『四教儀註』下末一)

＊143 魔のようなよこしまな人。(cf.『灌頂経』一二巻、大正蔵二一、五三四下)

＊144 おべっかを使い、偽って人を喜ばせること。

＊145 誤った道。邪道。

＊146 誹謗。そしり。

＊147 しばらく視るさま。うかがい見る。

＊148 煩悩のために心が迷乱状態に拘束されていること。(saṃyoga：『倶舎論』一巻・三ウ、二十巻・一ウ、二三巻・六ウ)

＊149 偽りあしらえる。

＊150 あざむきたぶらかす。

＊151 追いかける。

＊152 銭と絹織物。

＊153 他人にへつらって欺くこと。

＊154 神の言葉。

＊155 形勢で自然に屈服すること。

＊156 恐れで動じること。(『灌頂経』一二巻大正蔵二一、五三五上)

＊157 無数・無量なること。

＊158 叱り非難する。

＊159 おくびょう。

＊160 探し求める。

＊161 正道を直進して退転しない者。

＊162 ものごとに充実していること。(utsada：cf. *Bodhis*, p. 375)

＊163 ＝帝釈天。インドラ (Indra) 神で、梵天とともに仏法の守護神。

＊164 ＝四天王。帝釈天の臣で持國天・増長天・廣目天・多聞天。

＊165 Mahākāśyapa. 頭陀第一と呼ばれた十大弟子の一人。

＊166 Piṇḍola Bhāradvāja. 獅子吼第一と呼ばれた十六羅漢の第一。

＊167 Rāhula. 学習第一と呼ばれた十大弟子の一人で、釈尊の実子。
＊168 涅槃の俗形の音写語。
＊169 信念の基盤。(çraddhā-indriya : cf.『倶舎論』二巻・二三オ、二八巻・九オ)
＊170 心を動かす。
＊171 あきたる。こころよい。
＊172 果に向かって修行している期間。(cf.独覚向：『四教儀註』中下、二六)
＊173 佛が天上からこの世へ下ること。(cf.『彌勒下生経』大正蔵一四、四二一上)
＊174 願い求めること。(cf.『倶舎論』七巻六ウ)
＊175 Mahā-Maudgalyāyana：神通第一と呼ばれた十大弟子の一人。
＊176 Pāṭaliputra：仏滅後二百年の頃、アショーカ王のもとで、首都パータリプトラにて第三結集が開かれた。
＊177 しきりに心を痛め悲しむこと。
＊178 布きれ。
＊179 おおい。ふくさ。
＊180 はたき。
＊181 かんな。
＊182 口親＝布施。
＊183 めぐむ。供給する。
＊184 似て非なるもの。
＊185 正午から翌日の暁に至るまで。
＊186 食事をつかさどる僧。
＊187 比丘が非時に固形物を飲食すること。(cf.『五分戒本』大正蔵二二、一九七下：*Pācittiya*, 37)
＊188 設けそなえる。
＊189 非時食の対。比丘が規定の時間（早朝から正午まで）のうちに食すること。
＊190 非常に長い時間。三アサンキヤ（asaṃkhya）の時間をいう。
＊191 すみか。家。
＊192 畜生・餓鬼・地獄。
＊193 破れた器の意で、真実の法をうけたもつに相応しない者のこと。
＊194 怪の俗字。
＊195 くらう。噛んで飲み込む。
＊196 一族。同族。
＊197 慢心。驕り高ぶる心。(māna：cf.『雑阿含経』三六巻、大正蔵二、七〇五下)
＊198 悦楽に耽る人。(sukhin：cf.『百五十讃』七七頌)
＊199 願うこと。
＊200 勒令と同義か。無理矢理にさせること。
＊201 ＝親族。
＊202 Aniruddha：釈迦族出身で釈尊のいとこにあたる。十大弟子の一人にして天眼第一と呼ばれた。
＊203 Bhaddiya：P（カリゴーダーヤ子、釈氏王）
＊204 Nandiya：P（釈氏、阿那律・金毘羅と共住）

＊205 Kimbila：P（釈氏、阿那律・難提と共住）
＊206 Nanda：P（佛弟、守護根門第一）
＊207 跋難陀釈子：Upananda-Sakyaputta；P
＊208 Ānanda（釈尊のいとこで十大弟子の一人。侍者として二五年間釈尊に仕え、多聞第一と呼ばれた。）
＊209 Devadatta（阿難の兄とも釈尊のいとこともいわれ、釈尊について出家するも後に敵対し、三逆罪を犯す。）
＊210 Upāli（釈迦族に仕えた理髪師で、十大弟子の一人にして持律第一と呼ばれた。）
＊211＝引率。
＊212 澡＝洗。
＊213 Belaṭṭhasīsa：P：ベーラッタシーサ。阿難の和尚。
＊214 Vāsettha：古仙。
＊215 滅びることがない。
＊216 宿世からの習慣。（pūrva-abhyāsa）
＊217 諸佛の所説をよくたもって忘失しないこと。
＊218 縦横に交わり乱れること。
＊219＝急流。
＊220 この文殊師利への讃歎は、大乗との深い繋がりを証明するものである。
＊221 煩悩にけがれた心。劣った心。（cf. nihīna-citta：『倶舎論』二六巻六ウ）
＊222 両親のひざもと。
＊223 修行の偉大なる効果。
＊224 比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷。
＊225 新たに発心して佛道を学ぶこと。（cf.『維摩経』大正蔵一四、五四〇下、五五七上）
＊226 信仰の基盤。
＊227 成り立つこと。（cf. siddhi：『倶舎論』二巻四ウ）
＊228 徳の高い老人。